

**[B年] 聖霊降臨節第12主日(2023年8月13日)****【旧約聖書日課】エゼキエル書12章21～28節**

<sup>21</sup>また、主の言葉がわたしに臨んだ。<sup>22</sup>「人の子よ、イスラエルの土地について伝えられている、『日々は長く引くが、幻はすべて消えうせる』というこのことわざは、お前たちにとって一体何か。<sup>23</sup>それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。『わたしはこのことわざをやめさせる。彼らは再びイスラエルで、このことわざを用いることはない』と。かえって彼らにこう語りなさい。『その日は近く、幻はすべて実現する。』<sup>24</sup>もはや、イスラエルの家には、むなしい幻はひとつもない。気休めの占いもない。<sup>25</sup>なぜなら、主なるわたしが告げる言葉を告げるからであり、それは実現され、もはや、引き延ばされることはない。反逆の家よ、お前たちの生きている時代に、わたしは自分の語ることを実行する、と主なる神は言われる。」

<sup>26</sup>主の言葉がわたしに臨んだ。<sup>27</sup>「人の子よ、イスラエルの家は言っているではないか。『彼の見た幻ははるか先の時についてであり、その預言は遠い将来についてである』と。<sup>28</sup>それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。わたしが告げるすべての言葉は、もはや引き延ばされず、実現される、と主なる神は言われる。」

**【使徒書日課】****テサロニケの信徒への手紙一 1章1～10節**

パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。

<sup>2</sup>わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。<sup>3</sup>あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。<sup>4</sup>神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。<sup>5</sup>わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところ、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。<sup>6</sup>そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、<sup>7</sup>マケドニア州とアカイア州にいるす

べての信者の模範となるに至ったのです。<sup>8</sup>主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。<sup>9</sup>彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところ、どのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、<sup>10</sup>更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

**【福音書日課】ルカによる福音書12章35～48節**

<sup>35</sup>「腰に帯を締め、ともし火をともしいなさい。<sup>36</sup>主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようとしている人のようにしていなさい。<sup>37</sup>主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくと、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。<sup>38</sup>主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。<sup>39</sup>このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。<sup>40</sup>あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。』<sup>41</sup>そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、<sup>42</sup>主は言われた。「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物と分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。<sup>43</sup>主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。<sup>44</sup>確かに言うとおくと、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。<sup>45</sup>しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、<sup>46</sup>その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。<sup>47</sup>主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。<sup>48</sup>しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エゼキエル書12章21～28節

<sup>21</sup>主の言葉が私に臨んだ。<sup>22</sup>「人の子よ、イスラエルの地について、『日々は延び、幻はすべて消えうせる』というこのことわざは、あなたがたにとって何なのか。<sup>23</sup>それゆえ、彼らに言いなさい。『主なる神はこう言われる。私はこのことわざをやめさせる。もはや彼らがイスラエルでこのことわざを使うことはなくなる。』。それゆえ、彼らにこう語りなさい。『その日は近づき、すべての幻は実現する。』<sup>24</sup>イスラエルの家には、空しい幻やへつらいの占いもすべてなくなるからである。<sup>25</sup>それは、主なる私が語ろうとすることを語り、その言葉が行われ、もはや、引き延ばされることはないからである。反逆の家よ、あなたがたの時代に、私がこの言葉を語り、それを実行する——主なる神の仰せ。』

<sup>26</sup>主の言葉が私に臨んだ。<sup>27</sup>「人の子よ、イスラエルの家は言っている。『彼の見た幻は多くの日々の後のことであり、彼は遠い将来のことを預言したのだ。』<sup>28</sup>それゆえ、彼らに言いなさい。『主なる神はこう言われる。私が告げるすべての言葉は、もはや引き延ばされることはない。私の言葉は行われる——主なる神の仰せ。』

## テサロニケの信徒への手紙一1章1～10節

<sup>1</sup>パウロとシルワノとテモテから、父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケの教会へ。恵みと平和があなたがたにありますように。

<sup>2</sup>私たちは、祈りの度に、あなたがたを思い起こし、あなたがた一同について、いつも神に感謝しています。<sup>3</sup>あなたがたが信仰の働きを示し、愛のために労苦し、また、私たちの主イエス・キリストに希望を置いて忍耐していることを、絶えず父なる神の前に思い起こしているのです。<sup>4</sup>神に愛されているきょうだいたち、あなたがたが神に選ばれたことを知っています。<sup>5</sup>私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからです。私たちがあなたがたのところへ、あなたがたのためにどのように振る舞ったかは、ご存じのとおりです。<sup>6</sup>そしてあなたがたは、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、私たちと主に倣う者となりました。<sup>7</sup>こうして、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範となったのです。<sup>8</sup>主の言葉が、あなたがたのどこ

ろから出て、マケドニアやアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところに伝わっているのです。私たちはもう何も語る必要はありません。<sup>9-10</sup>私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたのか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち帰って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、彼ら自身が言い広めているからです。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方、来るべき怒りから私たちを救ってくださるイエスです。

## ルカによる福音書12章35～48節

<sup>35</sup>「腰に帯を締め、灯をともしいなさい。<sup>36</sup>主人が婚宴から帰って来て戸を叩いたら、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。<sup>37</sup>主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。よく言っておく。主人は帯を締めて、その僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。<sup>38</sup>主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。<sup>39</sup>このことをわきまえていなさい。家の主人は、盗人がいつやって来るかを知っていたら、みすみす自分の家に忍び込ませたりはしないだろう。<sup>40</sup>あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。』

<sup>41</sup>そこでベトロが、「主よ、このたえは私たちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、<sup>42</sup>主は言われた。「主人から、時に応じて穀物を配分するようにと、召し使いたちを任された忠実で賢い管理人は、一体誰であろうか。<sup>43</sup>主人が帰って来たときそのように働いているのを見られる僕は幸いである。<sup>44</sup>確かに言っておくが、主人は彼に全財産を任せるに違いない。<sup>45</sup>しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、男女の召し使いを叩いたり、食べたり飲んだり、酔ったりし始めるならば、<sup>46</sup>その僕の主人は、全く思いもよらない日と時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。<sup>47</sup>主人の思いを知らながらそのとおりに用意もせず、働きもしなかった僕は、ひどく叩かれる。<sup>48</sup>しかし、知らずにいて打たれるような働きをした者は、叩かれても少しで済む。すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、さらに多く要求される。』

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・8月13日「聖霊降臨節第12主日」の日課主題は「主の来臨に備える」。

・旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、預言者が象徴行為を通して捕囚の現実を預言する箇所。使徒書日課は、「テサロニケの信徒への手紙一」から、書簡冒頭で挨拶に続き宛先教会が信者として模範的であることを評価する箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、目を覚ましていることを教えるたとえの箇所。

**旧約日課(エゼキエル 12章より)**

・「エゼキエル書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第三に置かれた預言文書。「預言者エゼキエル」の預言活動録と預言集によって構成されている。「エゼキエル」は、第一次バビロン捕囚(前598年)でヨヤキン王らと共にバビロンに移住した祭司集団に属し、バビロン移住後に同地で祭司任職を受け、預言活動を始めた人物。ヨヤキン王は王位を剥奪されて「捕囚」としてバビロンに移送されていたが、単身で捕縛されていたわけではなく、エルサレムで宮廷政治を支えていた者たちと共に、バビロンで一定の「ユダ王国共同体」を維持し続けていた。エゼキエルは、バビロンの地で、ユダ王族らに助言する「宮廷預言者」同然の立場で活動していたと考えられる。

・本預言書では、各所に日付(第〇年の〇月〇日)が付されており、預言を区分する目安となっている。日課箇所の直近では、8:1「第六年の六月五日」という表示がある。通説では、日課箇所はこの日付の示す枠組みの中で告げられた預言に含まれないとされるが、預言書構成上、この日付を目安に時代背景を想定することはできるだろう。この日付は、前592年のことと考えられ、エルサレム陥落・ユダ王国滅亡まで5年ほどの時期。エゼキエルは、特定の歴史的出来事に関連する預言であることを明示するために日付を付していたと考えられる。8:1の示す前592年は、エジプトがバビロニアに対する反乱を起こした翌年。

・日課箇所を含む12章は、「主の言葉がわたしに臨んだ」という定型句が頻繁に繰り返されている(1節、8節、17節、21節、26節)。この預言定型句は、「エレミヤ書」(8例)や「ゼカリヤ書」(4例)にも見られるが、圧倒的に「エゼキエル書」でよく用いられている(46例)。「エレミヤ書」の「預言者エレミヤ」は、エゼキエルに先行して活動を開始した同時代の預言者で、ヨシヤ王(在位=前640~609年)時代の改革に参画した親バビロニア系宮廷預言者であり、ユダ王国滅亡(前587年)までエルサレムで活動していた。「ゼカリヤ書」の「預言者ゼカリヤ」は、バビロン捕囚後のエルサレム神殿再建事業が始まった際に、ユダ総督ゼルバベルや大祭司ヨシヤのもとで活動した預言者。彼らの間に一連の預言者系譜を見ることが出来る。

・「人の子」(22節、27節)は、「旧約」で広く用いられる表現で、一般に「人間」を指して用いられる。用例は「エゼキエル書」で圧倒的に多く見られるが、本預言書では、もっぱら「預言者エゼキエル」に対する神の呼びかけとして用いられている。なお、天から来臨するメシア的使者としての「人の子」という用例は、「ダニエル書」(7:13、10:16)以外ではほとんど知られていない。

**使徒書日課(Ⅰテサロニケ 1章より)**

・「テサロニケの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の8番目に置かれた書簡文書。使徒パウロが、シリア・アンティオキア教会派遣のバルナバ宣教団と袂を分かち独自の宣教団を組織して取り組んだ「マケドニア伝道」の中で生まれた教会共同体に宛てた書簡。同様の経緯で誕生したのが、フィリピの教会。フィリピとテサロニケの教会共同体は、パウロが「マケドニア州の諸教会」(Ⅱコリ 8:1)と呼ぶ教会群を形成していたと考えられるが、その実態は少数の熱心な信者に支えられた教会活動だったと推認される。しかし、マケドニア伝道は、パウロが自身の福音理解を徹底することにこだわって実施されたことでもあり、そこで誕生した諸教会には、パウロの宣教活動を支える主要な支持者が存在したと考えられる。本書簡は、通説では、「新約文書」中で最古に作成されたものと言われる。

・本書簡の差出人名は、「パウロ、シルワノ、テモテ」の三名連記となっている。「テモテ」は、「パウロ書簡」の多くでパウロの共同執筆者として名を連ねているが、「シルワノ」の名が並べられるのは、本書簡と「同手紙二」のみ。ただし、「コリントの信徒への手紙一」1:19には、この三者がコリント伝道に際して行動を共にしていたことが明記されており、パウロの「右腕」のような存在だったことが示唆される。他方で、「ペトロの手紙一」には、筆記者名として「シルワノ」の名が挙げられている(Ⅰペト 5:12)。これが同一人物であるとすれば、「シルワノ」は、パウロをペトロら使徒の主流派教会共同体と協調させていく上で重要な役割を果たした人物であったと考えることもできる。

・「倣う者(ミメータイ<ミメテース)」は「見習い」の意で、原義は「手本に従ってそのとおりに行う」こと。この語は、パウロが本書簡で再度使用しているほか(Ⅰテサ 2:14)、「コリントの信徒への手紙一」で2度(Ⅰコリ 4:16、11:1)、「エフェソの信徒への手紙」で1度(エフェソ 5:1)、用いている以外は「ヘブライ人への手紙」の1例(ヘブ 6:12)があるのみ。この語に並行して現れる「模範(テュボス)」の原義は「型」。「フィリピの信徒への手紙」3:17には、日課箇所6~7節同様、「ミメータイ」の派生形「シュンミメテース」と「テュボス」が並ぶ例がある。「テュボス」には、「偶像」を指して用いられる例もあり、パウロは、異邦人が諸偶像に倣うことから離れて、その代わりに「キリスト」や「キリスト信者」に倣うようにと勧めていたのかもしれない。

## 福音書日課(ルカ 12 章より)

・日課箇所は、「目を覚ましている僕のたとえ」として知られる箇所、「マタイ福音書」に並行記事が見られるが、両者にはさまざまな相違も見られる。「マタイ」はこの「たとえ」の現れる一連の句を、主イエスの受難物語の中で伝えられる「終末の教え」の中に位置づけているが、「ルカ」は集まって来ていた群衆に向けた教えの中に位置づけているが、途中でペトロの問いを挿入することで(41 節)、これを実質的に弟子たちに向けた教えに仕立てている。

・「マタイ」との比較から、「ルカ」は、「主人の思いを知って、それにふさわしく応じること」に使信の焦点を定めていると見ることができる。そこで、ここでの一連のたとえに描かれる「主人」は、必ずしも常識的な「主人」としては描かれない。すなわち、この主人は、婚宴から帰って来たときに僕たちが目を覚まして腰に帯を締め、ともし火をともし待機しているのを見ると、自ら「帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」と描かれる。ここでは、僕たちが忠実に留守を守っていたことが、なぜ帰宅した主人をして主従が逆転するような行動をさせるのか、まったく説明されていない。僕の行動描写と主人の行動描写の対応関係を修辭的に解釈するならば、僕と主人の間には相互の行動を模範とし、倣い合う関係性が示唆されていると言えるかもしれない。すなわち、僕が「腰に帯を締め、主人が帰宅したら、すぐに主人の食事の給仕をできるように準備していた」ので、主人は、自分が帰宅した際、同様に、「腰に帯を締め、僕を食事の席に着かせ、自ら給仕をしようとする」のであり、これは一見すると主人が僕の行動を模範として倣っているようであって、実は本来的には主人がそのような行動を取ってきたからこそ僕がそれを模範として倣う行動を行うことができたのだと読み取ることを、読者に求めていると考えられる。つまり、主人の思いを知って、正しく主人を模範として倣う行動を行う僕にとっては、自分が取るべき行動と同様のことを主人も取られていることを認識することができる。しかし、主人の思いを知ろうとせず、主人を模範として倣った行動を取ることをしない僕には、彼自身の取る行動に即した主人の行動を引き出すことしかできない。このような、いわば相互模範的な「主人と僕」の関係性を描くことで、「ルカ」は、「神と人」との関係のあり方を明らかにしようとしている。そこで、「ルカ」にとっては、何よりも「神の思いを知る」ことが出発点となる。

・42 節「忠実で賢い管理人(ホ・ピストス・オイコノモス・ホ・フロニモス)。「忠実で」と訳される「ピストス」は、「信仰／誠実」と訳される「ピスティス」の形容詞形で、「ルカ」では常に、「僕」の徳性を示す語として用いられている(12:42、16:10,11,12、19:17)。また「管理人」と訳される「オイコノモス」は、16 章「不正な管理人」の中で繰り返し用いられている(16:1,3,8)。

## 来週の誕生日 (8 月 13 日～19 日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-7 番「ほめたたえよ、力強き主を」(= I-9 番「ちからの主をほめたたえまつれ」)は、17 世紀ドイツ改革派牧師で敬虔主義者シュペーナーと交流のあったネアンダーが死の年に発表した詩編 103 編に基づく歌詞。曲は古くからドイツで用いられてきた旋律で、ネアンダーが自作の歌詞のために選んだ。J.S. バッハがカンタータで何度か採用している。
- ・21-470 番「やさしい目が」(= III-8、こ-114)は、新しい創作讃美歌集として 1976 年に出版された『ともいうたおう』に採用された讃美歌で、中学英語教師の深沢秋子が作詞、作曲家で阿佐ヶ谷教会員・小山章三が作曲した。1983 年版『こどもさんびか 2』、2002 年版『こどもさんびか改訂版』にも採用。
- ・21-543 番「キリストの前に」(歌詞 = I 537「わが主のみまえに」)は、1881 年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495 番)の曲、1903 年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537 番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。

## 21-7「ほめたたえよ、力強き主を」

*Lobe den Herren, den mächtigen König der*

1. Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren! / Meine geliebete Seele, das ist mein Begehren. / Kommet zu Hauf, / Psalter und Harfe wacht auf, / lasset die Musikam hören!
2. Lobe den Herren, der Alles so herrlich regieret, / der dich auf Adellers Fittigen sicher geführt, / der dich erhält, / wie es dir selber gefällt; / hast du nicht diese verspüret?
3. Lobe den Herren, der künstlich und fein dich bereitet, / der dir Gesundheit verliehen, dich freundlich geleitet; / in wie viel Noth / hat nicht der gnädige Gott / über dir Flügel gebreitet!
4. Lobe den Herren, der deinen Stand sichtbar gesegnet, / der aus dem Himmel mit Strömen der Liebe geregnet, / denke daran, / was der Allmächtige kann, / der dir mit Liebe begegnet!
5. Lobe den Herren, was in mir ist, lobe den Namen! / Alles, was Odem hat, lobe mit Abrahams Saamen; / Er ist dein Licht, / Seele, vergiß es ja nicht, / Lobende schliesse mit Amen!